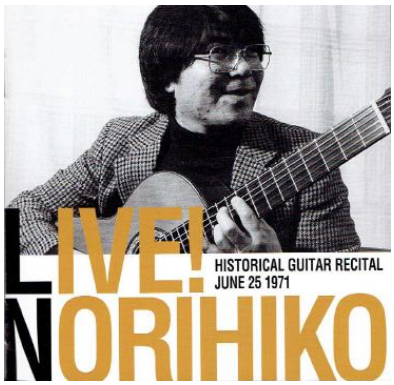
ギターCD レビュー from yakateru(第１号)

まもなく還暦を迎える今日、これまで 50 年近くやってきた Guiter に関する書き物をしようという気になったのは、ともかく、今までのギターへのかかわりは、「ただ弾く」ということにのみ意識があり、ほとんど考えてこなかったということが、この期に及んでわかったからです。ということで、今から書き綴ります。

ギター演奏へのあこがれの出発点「渡辺範彦」の CD を聴きながら



渡辺範彦というギタリスト

小学校の高学年の時から、ヤマハにギターを習いに行ったこともあり、高校生のころは、それなりに弾けるようになっていた。まあ、そのころは、レッド・ツェペリンやシカゴなどの ROC にもはまっていたこともあり、クラシックギター一辺倒というわけでもなかった。そういえば、文化祭では、同級生とロスインディオス・タバハラスの「マリア・エレナ」なんか弾いて遊んでいた。

そのなかで、今でも記憶が確かにあるのが、渡辺範彦が、パリのギターコンクールで優勝したということと、その時の映像をビデオで録画しており、何度も見返したという記憶である（本当に、そのころ自宅にビデオがあったのかは不明ではあるが)。なにか、朴訥とした青年が、ムダラのファンタジアを弾いていたが、その出だしの不協和音的アルペジオのかっこよさに心酔した。記憶としては、そのコンクールで、2 位、3 位の映像も入っており、その演奏が、ヴァイスのプレリュードであったり、ダウランドのファンタジアであったので、この 3 曲が、自分の中のかっこいい曲 BEST３となっていたし、大学時代のヤマハコンクールでダウランドのファンタジアを弾いたのもこの影響である。そして、この気持ちは今でも変わっていない。残念ながら、渡辺範彦のレコードや CD はほとんどなく、唯一、ビラロボスの練習曲が入ったレコードが唯一、所有しているものであったが、今回、アマゾンで武蔵野公会堂でのライブ録音の CD を手に入れて聴いてみた。

演奏会そのものが録音されているため、拍手や調弦もしっかりとはいっており、演奏会の臨場感を楽しめるようになっている。

最初のフレスコバルディの「アリアと変奏」は、指ならしの曲なのか、テンポ良く弾くというよりは、確実に弾くことを心掛けているようである。しかし、魔笛やビラロボスの練習曲 NO1 になると、その技術力の高さ、音の確からしさが際立ってくる。評論に書いてあったが、セゴビアの再来かとも言われた彼にふさわしく、音が、全く媚びていない。ちなみに、同時期の日本のギタリストの庄村清志は、媚びた演奏の最たるものであったような気がする。ただ、媚びた演奏が悪いかというとそうでもないと思う。プロ意識が高い演奏家は、自分の音楽性の追求と、人に聴いてもらうときの演奏姿勢を両立させなければいけないのだが、自分の音楽を追求することとは別に人様に聴いてもらってお金をもらうということを強く意識すれば、いい言葉表現すれば聴衆に寄り添った演奏、悪い言い方をすれば媚びた演奏になるのではないだろうか。

さて、今回、還暦を迎えて、改めてギターを弾くことで考えているのは、その点であろうと思っている。媚びているのとは違うが、これまでのギター曲への自分の姿勢が、ともかく、全体のフレームをつかみ、そこから、細かい作業に入っていくというもので、これは、34 年間やってきた建設コンサルタント技術者としての仕事の仕方も同様であった。この方法のいいところは、ともかく、完成度さえ気にしなければ、どの段階でも、通して弾けるという点にある。そして、問題は、その完成までほど遠い段階であっても、飽きてくると次の曲へ気が移ってしまうということである。ということで、よほどの気合が入っていなければ曲は完成しないままに、終わってしまうのである。そのため、楽譜を見ればそれなりに弾けるが、暗譜して弾きこんだ曲が少ないという現実が生まれる。ただ、これが全く悪いことであったかというとそうでもなく、ともかく、ギター音楽といえども、その世界は広いことを知ることができた。ルネサンスのミラン、バッロク、ソルやアグアドなどのロマン派、タンスマンやポンセなどの近代派、ボサノバから JAZZ から、ラウロなどのラテン、ピアソラまで、次から次に魅力的な曲が目の前に現れたので、ネットサーフィンのように曲のサーフィンを行ってきた。まあ、これまでは、結構それで楽しかったのだが、ここにきて、あらためて雰囲気だけ楽しむのではなく、少しきちんと曲を分析して弾きこんでみようかという気になってきた。

さて、今、ヴァイスのファンタ

ジアとバッハの無伴奏チェロ組曲第 1 番のメヌエットをそのまな板に載せようと思っているが、弾き始めると、さらりと弾いていた時は弾けたものもなぜか弾けなくなったりと苦心している。これは、これでいいことであろうと信じ、これまでと違う道を歩み始めたところである。さて、ちゃんと続けられるであろうか。自分で自分を観察してやろう。（続く）

なかなか感じのいい CD ジャケット裏面